

巻頭の辞

名古屋大学農学国際教育協力研究センター長
竹谷 裕之

食糧・農業・環境といった農学領域の問題は、人々の生存基盤に関わる問題であるだけに、その有り様は常に多くの人々の関心を集めてきた。今日、少なくない途上国は依然不安定な生存基盤に悩まされ、脅かされているが、その原因を考えると、途上国の内部要因によって形成されてきたものでもあるが、先進国との密接な関係の下で作り出され深刻化していることを否定できない。

グローバリゼーションの進展は、先進国は勿論、大半の途上国を巻き込んで、産業は言うに及ばず、生活の隅々にまで、その影響下に置くに至っている。途上国の砂漠化問題を一つとっても、土地の過剰使用、過剰放牧、森林皆伐等々が直接の原因であるものの、それら原因を作り出すのに先進国の交易活動、開発活動、資本投入、援助活動等が大きく関わってきた。その意味で途上国における食糧・農業・環境など農学領域の問題は、その解決も含め、技術、産業、開発、交易、援助などの国際関係を抜きにしては考えられない。問題の有り様と原因を的確に解析し、解決方法を見定めていく学術研究が必須である。

多くの途上国はまた、農村を中心に深刻な貧困問題を抱え、その克服に向け外資などを活用して脆弱な産業基盤を強化すべく取り組んできた。しかし、多くの途上国は自由な資本移動が一日にして国の富を半減させる事態に翻弄され、新たな貧困に突き落されている。貧困は暴力など社会悪の温床と言われるが、国家の力、資本の力等を合わせて考えてみない限り、克服することは困難である。貧困は経済的、社会的、政治的といった各側面が複雑に絡み合ったもので、その態様と原因を確定し解決法を解明するには、学術研究が不可欠である。

こうした学術研究を途上国と協力して推進し、その成果を活用し問題解決を担う人づくり教育を重要視する必要が国際機関をはじめ、多くのところで共通認識となってきた。「持続的発展」「循環型社会」等がキーワードに成りつつある世界にあって、我が国で農学をはじめ、教育、工学、医学、法政の国際教育協力研究センターが設置されたのも、世界的な流れに応え、「学術研究と人づくり教育の国際協力」を通じて、人類史的課題解決に向け、貢献しようとする意図の表れである。

「学術研究と人づくり教育の国際協力」に関する研究は、我が国ではいまだ未開拓の領域にある。農学分野では、科学研究費の分科、細目、キーワードに国際協力もなければ農学教育すら設けられていないこと、欧米等には業務管理学博士があることも知られていないこと等にその一端を窺い得るが、この種の研究活動が持つ意義・重要性から見て大いに発展させるべき領域といってよい。問題の確定、背景に対する基礎調査と真のニーズの発見、新技術の受容と展開の仕組み解明、各種プロジェクトの評価、知的・人的資産の発掘とデータベース化、協力ネットワーク形成と連携調整方法、派遣専門家や途上国カウンター・パートの研修企画など、「学術研究と人づくり教育の国際協力」の効果的推進には固有の研究が必要とされており、またその研究自体、国際的な視野と広がりが進められてこそ発展させ得る性格を持っている。

途上国の農学領域の問題は、その自然的社会的歴史的条件の多様性故に個々様々である。これらの多様性を踏まえ、個々の途上国に相応しい「学術研究と人づくり教育の国際協力」のあり方と内容を解明する研究を進展させることによって国際協力は新たな地平を切り開かれ、農学分野の問題解決に大きな力を発揮し、人類の生存をより確かなものにする事ができよう。

ここに創刊する学術雑誌『農学国際協力』は、これら様々な研究成果の受発信の場となり、研究交流を深化させる場となることを目指している。関係者各位の積極的な寄稿と支援を心より期待する次第である。